

## 在特会の論理（2）

——「心震える歴史」を経験したB氏の場合——

樋口 直人

### 1. 問題の所在——在特会とは

在日特権を許さない市民の会（在特会）は、重い刑事罰を伴うようなテロなくして注目を集めるに至った珍しい団体である。まず、行動右翼が「少数精鋭」の構成員からなり、市民社会の縁辺に蠢く存在であるのに対し、在特会はほとんどが職を持った「普通の」メンバーからなる。次に、そうした人たちの動員に成功し、実態は弱体であるものの設立後数年で全国に組織を広げるに至った。さらに、そこに集う活動家のほとんどは、インターネットを介して集まっている。実際、動画での配信に関しては左派の市民運動を圧倒的に凌駕しており、左派が後追いをするような状況がある。最後に、その主張は「在日特権」に体现されるようにゼノフォビアを前面に打ち出しており、これも従来の右翼とは異なる。

これは在特会が新たな動員の市場を開拓した背景でもあり、それは強みであると同時に弱みにもなる。在特会会長たる桜井誠氏が1970年代生まれであるように、運動経験のない若年層主体の組織であるがゆえに、組織運営に長けた者が少ない。運動が上り調子の時にはそれでもよいが、2010年9月に逮捕者が出るといった問題が生じた場合、あるいは内紛が生じた場合には脆さを露呈することとなる。

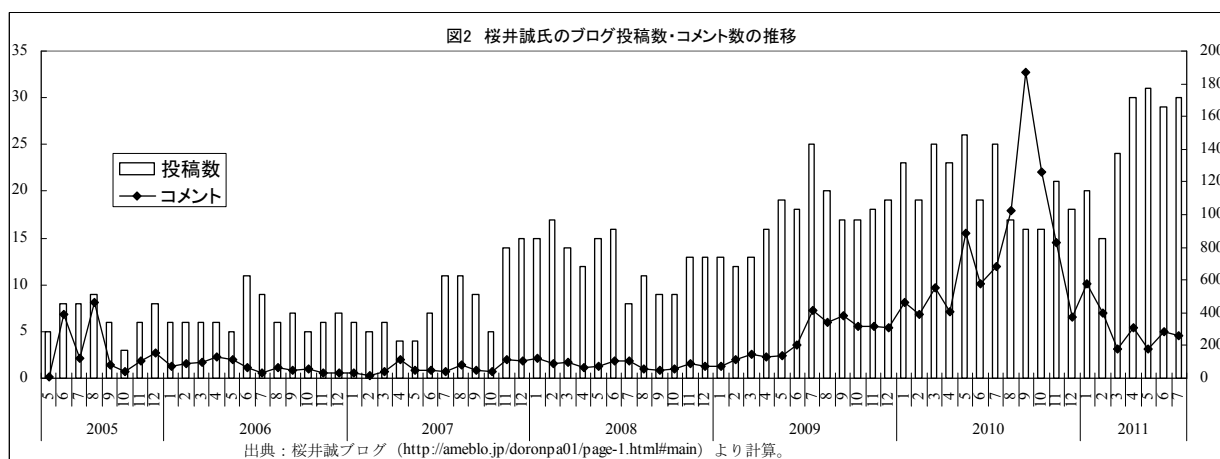
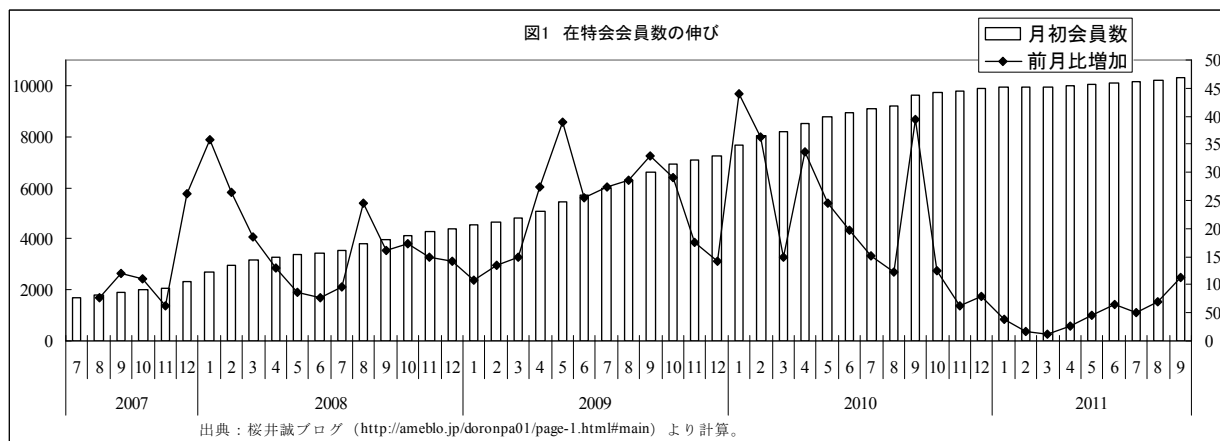
実際、在特会に対する注目の度合いは短期間で大きく変動してきた。それを示すのが図1と図2であり、図1は在特会の会員数の推移を、図2は会長である桜井誠氏のブログの月別エントリー数とコメント数を計数してある。両者からわかるのは、2009年の春以降から会員数・コメント数も増加する点であり、これは活動家たちがいうように「カルデロン・デモ」によって在特会の知名度が上がったことによるだろう。図1と図2の比較で興味深いのは、図1より図2のほうが2009年になって急速に増加していることである。すなわち、「在特会」の知名度が上がる以前は桜井氏に対する個人的な注目もなく、在特会が話題に上るにつれて「桜井とは何者か」と関心が集まっていった。桜井氏による投稿件数も増加しており、それに応えようとしていた様子が伺える。

桜井氏の軌跡を中心としたルポが注目を集めたのも（安田 2010, 2011）、こうした状況を背景にしている。

実際、一連の調査から以下のようにして在特会の担い手が参集したという簡単な青写真を描くことができる。まず、民族派の流れを汲む右翼活動家があり、それが排外主義を打ち出したのが最初の核となる。それに桜井氏のような若年層が加わるようになり、自前の組織を立ち上げる時には一定の数になっていた。この時点では、他に活動をしていた者が在特会を立ち上げたことになり、東アジアの近隣諸国に対する反感を吸い上げていった。その意味では、従来の運動が蓄積してきた歴史修正主義や拉致といった火種を借りている状態だったともいえる。カルデロン・デモは、そうした点で在特会が自ら作り出した運動の火種であり、それに呼応して担い手を集めるという点で従来の運動とは独立した基盤を開拓したともいえる。

しかし、在特会の会員数は2010年春から伸び悩むようになり、2010年9月を境としてその傾向は明確になった。桜井氏のブログも同様で、これ以降はブログのコメント数が低下していき、2009年春以前の水準まで下がっていった。この2010年9月には、京都の朝鮮学校の前にある公園で起こした行動により逮捕者が出ており、その時だけは会員数も増加しブログへの書き込みも増加している。だが、それが結果的には大義を持った運動としては捉えられなかったことは、その後に会員数が伸びなかったことをみれば明らかだろう。その意味で、この逮捕事件は運動に対する支持の獲得という観点からすれば、在特会の短い歴史のなかで最大の汚点であり失策だったといってよい。その後は、副会長、支部長、運営（幹事）といった役職者が次々に交代し、その後の担い手を探すのも苦勞する状況におかれている<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 支持者離れにより寄付も集まらなくなり、裁判費用の捻出にも困難を強いられている。活動費が配分されないため、各地支部で不満が高まっているといわれるが、予算がないなかでやるしかないと切り替えているところもある。筆者を含めて調査に対して協力費を請求するようになったのは、第一義的にはこうした財政逼迫によるものと思われる。



このように、在特会は運動組織としては停滞ないし衰退局面に入りつつあるように見えるが、地域での活動を通じた活動家同士の連帯が蓄積されてきた側面もあるだろう。そうした点に関して興味深い経験を披露している C 氏（30 代男性）に対して、2011 年 5 月 22 日に聞き取りを行った。

## 2. 政治に対する関心

全くなかったです。大学時代までは全くなくて、そもそも社会とのつながりを自分と当てはめたってのはあまりないですね。極端な話をしてしまうと、就職活動を大学時代にやりましたけど、それもやっているというのがいわゆる言い訳みたいな感じで、あまり積極的に働くようなつもりもなかった。何がやりたいというのがないまま、もともと高校から大学上がったのもやりたいことがないから、何となく取り柄もないし大学行っとくか、という感じで行って。4 年間の間で空手やったり運動とか、そっちの方面ではあったんですけど、いわゆるこういう方面で働きたいとか、こういった仕事したいというのがないまま、就職活動する形になって、面接とか当然落ちますから。そんな状態ですから。

で、あまりそういった部分では社会に出て何だかんだというのは、学生のときまではなかったですね。それが幸か不幸か就職活動していくなかで採用決まって、そこに入ってそこで 8 年間働いて。その会社が 3 年前に倒産しまして、それからその破産処理とかやりつつ、再就職活動して 3 ヶ月後に今の現職の会社に入って。で、今に至るような。ずっと財務経理畑ですね。

なんで、元々はまったく新聞も読まなければ何も読まない、世の中のことにそもそも趣味的なこと以外で関心がない。ま、よくあるパターンっちゃパターンなんですけど。政治に関心持たないという意味では。

選挙だけは絶対行ってましたね。やらなきゃいけないものだと思ってはいたんです。選挙権の行使というものは。ただそこに何かの目的があったとか、こういった体制がいいとか、そういった形はなかったですね。多分、今選挙あって投票行かれる人って、ポスター見て顔の感じとか、いわゆる公約的な耳障りのいいものとか。基本的に若い時って反権力とかそっちのイメージでやっぱり物事考えることがあったんで、そういった何か偉そうじゃない人選んだり

とか、そんな感じで投票でしたね。

（投票先は）昔から自民党だったんですね。政党としては、そうですね。あの、実家のほうが農村部で場所的に保守的な層が厚いところで、というのを子どもの時からずっとそういうのを聞いていて、何となくそこで。自民党が保守政党とかうんぬんって、そういう発想自体がまずなかったです。結局、政治なんて数なのに、全員受かっても単独過半数取れないところに入れたってしゃあないでしょ、ていうのはありましたね。あと本当に農村部だったっていう。

ただ、働き始めてだんだん若い人、若いからいいっていう、まあもの考えていない年ですから、見た目と若いから何かやってんじゃないかというくらいで投票していた感じですね。元々は。

ただ、一つだけ今思い出したんですけど、学生のときに薬害エイズって問題になって、それに関しては本当にニュースでも何でも確認したりとか、本読んでみたりとか、何でもこういったことがおきてしまったりとか、そういうことは勉強しましたね。それが政治だとしたら、それが初めての政治とのかかわりかもしれないです。ただ、あの時自分の感情を今言うのだったら、政治の勉強しているというよりも、イベントをみている感覚に多分近かったと思うんですね。

『ゴーマニズム宣言』を）薬害エイズの時には読んでいました。それ取り上げられているときは。あと母親の方が読んでたんで、たまにかいつまんで。僕、『お坊ちやま君』世代なんで、小学校3年生のときに昔の小遣いですから、小学1年で100円、2年で200円、3年で300円というときに、『コロコロコミック』が330円で、やっと自分の小遣いで雑誌買ったんです。毎月漫画本を定期購読できるっていうときに、ちょうど始まったのが『お坊ちやま君』で、その小林よしのりがまだ書いているらしいって、それが母親が居間に普段ずっといますから、そこに積んであったら何となく…。ただ、基本的にマンガって流し読みするものと思ってたんで、あの字を…かえってマンガにすることで読みにくくなっているのかな。その時はそんなに思わなかったですけど、ただちょうど自分がニュース見てこれはひどい話だと思った薬害エイズで、小林よしのりが絡んで、本当に考えました。

### 3. 外国人との接点

基本的に学生時代まではなかったんですけど。働き始めてから、最初の8年間働いたつづれた会社で働いている時に、朝鮮系の方と関わることが多々あ

ったという。取引先で。契約関係の看板貸しとかいろいろあって。

多分、これ言わないとわかりにくいと思うんですけど、私自身が元々入った会社がパチンコ店だったんです。それまでは逆に在日韓国人朝鮮人っていうのがそもそも日本にいるっていうのが、まずわからなかったです。で、取引する人とかそっちの方で関わってて、普通の常識とはちょっと違う会社とあってあるんですね。やっぱり文化の違いといいますか。そういった部分で何よ、何なのあの人、と言ったらあの人は何人だから違うからって。

まあいろんな人いました。それこそ全朝鮮人韓国人が悪いってことはないんです。普段一緒に仕事して、一緒に飯食って、仕事でこれからどうしようかみたいな話ができるような人ってのは、当然それだけで普通の日常生活はそんな悪い人なんていないですから、普通の人間関係なんですけど。僕の中でやっぱり上の世代の人、二世とかそれくらいの人たちは、やっぱり怖かったですね。単純に恫喝とかもされますから。いわゆる朝鮮系の方だったら、俺は朝鮮総連のなになににだぞ、というのやっぱりあるんです。

で、そういったなかで、でもその時もいわゆるそういった人たちがいるってだけで、今の在特会に入るに至るまでのものかえってのはまずなかったです。そういった迷惑なおっちゃんがいるっていうくらいで。

電話かかってきて「ぶっ殺すぞ」と言ったり。実際すごく恫喝するんですよ、やるときは。僕ら外の人間だからしなかったですけど。いわゆる朝鮮学校をずっと出て学歴なく、在日同胞の門を叩いて渡って行って、知り合い関係がなかったら仕事できない。そこでうまくいかなかったら、もう死んでしまっしかな。そういった世界の話っていうのを——後からその話を聞いて「だからあの子死んじゃったんだ」というのもあったんですよ。

とある関連企業と一緒に仕事して、設備関係の仕事をしてた。そのときに、設置してその機械がうまく動かなかった。「何で動かないんだ」と恫喝したら、その子が死んでしまったと。目の前からいなくなったのかどうかわからないですけど、「お前らのせいであいつは死んじゃったんだ、どうしてくれるんだ」とよくわからないことというわけです。「お前らのところでつけるときに間違っただのを、俺が怒ったら死んでしまった」。言われたほうもわけわからないですけど、ただそれはないだろうと思ったけど、後で門叩いてやっと仕事見つける、そこで切られた

ら生きていけないというところで切られてしまった。そういったこともあったのかなあって。自分がふれてた世界のことをあとから自分が話聞いて、ああこういったことだったのかな、という風に僕の場合は特殊ですよ。実体験からですから。

(在日特権と実体験との関連) それは関係ないです。ただ、そういったこと荒っぽいところする人たちが総連系にいるっていうことは間違いないです。僕はそれ(在日特権)じゃないというか。居候の意見を通そうというわけじゃないですか。当の日本人だって、この国がどうにかなったときにちゃんとケツもって何かできるのかわからないのに、その時に人にやってられるか。特権云々とは関係ないですね。一緒に生活して、それこそ仕事して、普通の生活してて、そこに何も問題はないですね。利益集団ってことですね。

基本的には在日が怖いからだと思うんですよ。パチンコで換金が認められてるのも、国税調査とかもそんなに厳しいものが入らないという話もありますし。その怖さを担保にしたという部分で、その形がしっかりとシステムの中に組み込まれてしまったのが今なのかなと。あとわからないものに対する恐怖心とかってありますからね。実際怖い人はやっぱり怖い。それは日本人もそうなんでしょうけど。

#### 4. 在特会へ

##### 《心震える歴史》

本当にひよんなことなんですけど、いつだか覚えてないです。ただ9月の雨が降っている日ですね。何かあの、基本的に戦後教育を受けて生きてきたなかで、台湾の人たちが——リアルプレイヤーかなんかで聴いたと思うんですけど——ネットで話してたんですね。昔の日本っていうのはこういったもので、こういった歴史があって、それに対して今の日本人は昔のことを悪く言うばかりで、という話があったんですね。そこで、ちょっとその当時(家に)ネットもありましたし、本屋にいったらいくらでも本もありましたし、そっち系の本を読んだときにそれまで教えられなかった心震える物語がこの国にはあったんだ。そういうことを思ったときに、そういった国を貶めているのは一体どういったものなのか。

で、その中でいわゆる反日左翼って我々が定義している集団、民団・総連とか、それを支援する日本人団体とかっていうのが出てきて、という感じですね。だからきっかけ自体は自分の身に何かあったとか、接点はありましたから、元々素養というか人よりは外国人と触れることが多かったのかなとは思

んですけど、うまく話できないですね。ただネットで聞いたラジオそれ一個きっかけで。李登輝さんと誰かが話しているやつだったと思うんですよ。その時のことだけは妙に覚えているんです。日本人から言われたのではなく、外国人から言われたっていうのが大きかったと思います。

ネットで個人の方がデータを置いてたんでしょうね。何でそれを見たのか、何でそれを聞いたのか。興味持たなかったら、政治関係のサイトなんてアクセスなんてしないですから……。ただ何となくそういったのを拾っちゃったんでしょうね。拾って聞いてみたら、何か急に心震えるものがあった。そこから勉強をちょっとずつして。ネットからとって本を——図書館行ったりとかですね。以前住んでいるところが非常に図書館から近くて。車で10分くらいのところだったので、ちょっと行って。ネットで調べてそれを検索かけて、あったらそれを読んで。なかなかタイトルとか覚えてないんですけど。

基本的に我々受けてきた戦後教育は、いわゆる明治期以降ってどんどん暗黒の時代に向かっていくという流れで、その後昭和20年の敗戦でもって解放がされたというのが基本的な流れで教えられてたと思うんです。それこそ教科書の最後なんてまともにやらなかったですから、本当に駆け足でこういったことがあってこうこうで、本当にひどい時代があったけど……。戦争には負けたけど、そのお陰で憲法九条のようなすばらしいものができて、当たり前前に考えたんですね。

そこがもとでいろんなこと自分で考えたときに、その暗黒の時代だったといわれている昭和初期から戦中のときにちょうど戦争に行ったか行かないかっていう世代が、僕らの祖父の世代ですから。うちの場合は両方とも戦争には行ってなかったんです。父方のほうが、足がない人だったんで、もちろん徴用されなかった。母方のほうが訓練中に終戦を迎えたとかだったんで、行ってない。そうした戦争体験とかに関してはかなり希薄な部類だったので。原体験としてそういった人の話を聞くこともなかったです。本当にラジオ(だけ)ですけど。

##### 《在特会へ》

在特会に入ったのが2007年の11月くらいなんです。メール登録して。もろもろやっていくなかで、李登輝さんのラジオ聞いて、本なんか読んで、そういったものをネットで探した時に、今の会長の桜井が昔ネットラジオ「不思議の国の韓国」ってやっていて。それをネットダウンロードして通勤とか出張



とか外回りするときに、そういうの聞きながら動いたりしてたんですけど。なんで、それを一番最初に聞いたのって、そのネットラジオって結構前からやってたんで。2週に1回の更新で。それからいったら2005年くらいですかね。そうだと思うんですよ。その当時は在特会じゃなかったんですよ。そういうことを会談形式で30分とか長ければ1時間の番組をずっと流して、それを聞いているリスナーだったんですね。そのまま在特会立ち上がった、じゃあ入ろうかって。

結局在特会に来る人たちって、在特会しかなかった。ネット主体で入れる場所が在特会しかなかった。選択肢はそもそもなかった、あの当時。という感じですね。何で入ったかって聞かれたら、そこですね。

（隣にいる）〇〇さんは、桜井さん知らなかったんですよ。ネットラジオ聞いてない。そこに集まった人でネットラジオを聴いていたのは僕ともう1人くらい。

（入会は）そんなに何か考えての行動ではないです。一番最初が、集まったのが、2008年にとりあえず酒でも飲もうかっていう感じで。普段こういった話をするのしない人間が、いない人間が一同に会したわけですから、まあ盛り上がるわけですよ。年齢層も広くて、その時は僕が一番下のほうでしたね。僕の中ではネット右翼だから若いのしかいないと思ったら、おっちゃん、おっちゃんばかり。え、何この集まり？

（最初に居酒屋で集まったのは）集まろうと言われたら集まるんです。一応何かしらの流れであつても入って、そういった人間が集まるんだつたら、そういった人と話ができるってすごくいいと思って。僕、結構人好きで、人に誘われたらどこでもひょこひょこついていく。そういった集まりで、しかも普段そういったこと話する仲間も周りにいない。それで集まろうといわれたら、僕の中では行くの当然なんですよ。

流れ的にはそんなに不自然じゃない。実際最初の在特会って何をするのか結局わからなかったですから。支部に入っても、デモをしたら何だか抗議活動するとかなく、基本的には講演会、勉強会。でも勉強会って確か1回だけだったんですね。2008年の3月頃にどこかの一室借りて、外国からみたなんか日本史みたいな講義を——確か前支部長の方でやられて。そもそも在特会が、今まで嫌われるような知名度もないですから。何もしてないですから。会長が街宣をやったりとか、というだけで、一般参加者が集まってのなんちゃらっていうのは、まだ最初

はなかったです。

勉強会やって飲み会、5時からつば八で11時までやっちゃう。その時は激論ですよ。その後初めて、桜井さんが講演会をやったんです。そのときまだ12、3人しか集まらなくて。その時も、勉強会で具体的に外で何かするってのはなかったですね。ただその後、今いるメンバーで大体ばーんと揃って。今一般で参加されているご夫妻とか。教科書を作る会の人とか。そういった人たちが集まったのがそのときで。そうしたら、僕らはそういった界限を知らないんでわからないですけど、彼らの中に基本的に狭い社会でできあがってるから、ああなんているんですかみたいな感じで話されているのを僕ら見ていて、何も分からない。

集まっている人っていうのが、基本的には以前から何かやられている方で、新しい歴史教科書を作る会とか、そういうところから以前からやられていた人とか、すごい勉強している人とか。なんで、僕最初に在特会に入った頃は、「お前は左翼だ、その考え方は左翼だ」って半年くらいは言われてた。で、結局それがよかったですよ。みんなで意見ぶつけて話して、それでその人が言った本を改めて読んだりとか、そっち方面勉強してみようっていうところで、やっぱりいい稽古なんですよ。そういった酒の場で話をするって。その中で話したことをいざ家に持ち帰って、考えてみたときに、納得いけるものは納得するし、納得できない理由を探すのも勉強するしかないし。で、本読んで。で、半年くらいたつたらちょっとこの人がまた「こいつちょっとわかってきたな」みたいな顔して。でもその時に、「でもお前は話し方が左翼だ」って。でもそういった感じで話していくのが、お互いの元からさらに勉強して高めあおうっていう。

その後はチベット問題というのがあの頃クローズアップされていて、それに対する抗議活動を行おうというですね。中国に対する脅威だとか、これからこういったものを認めたときに起こりうる状況っていうのを顕著に示しているのがチベットである、ということと考えたときに気持ちの中で勝手に連帯しちゃったんです。「今日のチベットは明日の日本」だつていうキャッチフレーズがあったけど、あれはその通りで。そんな簡単に、そんなことにはなるはずはないんですけど。そんな弱い国じゃないですから。政治的にも、ポテンシャルでいっても。ただ、もしそうなってしまう可能性が万が一でも発生するようなことは、しちゃいけない。実際にそういった国があるわけですよ。そうなってしまった国がある以上、

応援したい。

《勉強会から街宣へ》

そこ（飲み会）で話をして、その後、その前後ですかね、初めて外での街宣活動をするってことに。デモの参加者を募るためにビラ撒きやって何してってところで、いったんパンと人が飛んだところはあるんです。それまできている、飲み会でといった人がいなくなっちゃって。

そのハードルをクリアできたのは経験者で、ノウハウ——いわゆる警察に申請出してなんちゃらって。実際にこういった人が来たらどうするかとか、それこそ昔ながらの民族派の人たちが来て「お前のしゃべり方はなっていない、マイクかせ」となったときにマイクをどうやって取り返すか、そういった現場の経験があって、僕はそれに乗っかって。

僕らのときは学校の時に、宗教の話と政治の話は会社にいったら絶対にしちゃいけない、あと野球。摩擦のもとになるから、と学校で教えられませんでした？ 小学校の時はなかったですけど、中学校校のときですかね、そんなこと言われて。言われたので、逆に言えないんですよ。そうやって育ってきているから。そんなにまじめな学生じゃなかったけど、そういった教えて意外と骨身に染みてというのがあって。やっぱり、日の丸の下に我々は集うわけじゃないですか。だけど日の丸に集うというのは基本的に悪いイメージの右翼が作ったのであって、あまりよろしくないんだっていうのが学校教育であったわけで。

そのときに、僕は頭の中では日の丸のもとに集うべきだというのをわかっていたし、そうするべきだと思ったんですけど、体が一瞬躊躇したんですね。ああ、あそこにいるみんながそうだからデモだっていうときに、いったん止まっちゃったんですね。そっちのこと自体がすごいショックでしたね。だから、戦後教育大成功！ だから僕はその会場に入るまでに一周しました。じゃないと向かえなかった。あれは自分で全然考えたことも、そうするのは当たり前だと思っているのに、いざやろうとしたときに自分の心と自分の体が本当に乖離して。そのことが一番ショックだった。

（街宣をしたのは）広めたい健全化したいと思って、「ああそういったことできるんだ、じゃあやりたいなあって」。…それ（葛藤）はやっぱりありますよ。やっぱり私も普通の会社員ですから、それこそ人事のほうに（情報が）入ったら、もしかしたら「ちよっとこいつ面倒くさいから、ここで離すのにちよ

うどいってやっちゃえ、さすがに沖縄まで行ったらそういうことしないだろう」って。やっぱりそういったのは過去の経験っていうのが、昔の学生運動家が、がちがちの共産主義系のローカルユニオンとか、そういったのができたときの大変さを知っている企業だったら間違いなく受け入れないですね。

（ハードルを乗り越えたのは）広めたいから。今もそうなんですけど、ばれてやばいとかいうよりも、面倒くさいな…。やっぱり会社員としてのあり方とか、人事から何か言われた時に。今もそのつもりでやってるんですけど、人から文句言われただけ仕事したら、休みなんて何やってもいいでしょ、支障きたしてないでしょ、だから休みだって来るし。なんで、今仕事たくさんしているのも、やりたいことをやるって決めたので。でも基本的に「こういったものを世の中で健全化させて、何とかしなきゃいけないよね」というところが、もともとの集まりじゃないですか。設立の段階でも、そういった趣旨でやっているわけですから。

その時に街宣とか街中で物事やるとかいうことに対して、全然自分のなかにまったくないものだから想定ができないわけですよ。やってみたら、まあなかなか大変だったり、通行人の人にビラを渡して、目の前で破られたりとか、普通にありますよね。でも、やっぱりこういったことをやらなきゃっていうか、やった損得じゃなくて1人でもいいから伝えたいっていうのはありますよね。賛同しなくても考えてくれればいいと思うんですよ。なんで、そこに至って街頭でビラまきするってことに対しては、正直何もなかったですね。

ただマイク握る時は本当に（葛藤）がありましたね。マイクを握るっていうのは、人前でしゃべるとそれだけで違いますよ。もともと上がり性だったのですが、そういったもので。あと、そんなに人前で立派にしゃべれるような立派な人間じゃないっていうのが心の中であったりするし。でもそのことに対して何かいいことがあったら、やっぱやるんですよ。

集会の方は楽です。集会場でしゃべるのは、基本的に仲間達ですから。ただ、それと公に対してしゃべる時の街頭マイクってのはずいぶん違いますよね。デモ…大変ですよ。デモで前でマイク握って、その人たち背負って、自分達の意味を伝えているわけじゃないですか。ヘンなこと言っちゃったら、それこそその人たちに恥かかせることになっちゃうし、という風に思いますよね。ただそれと同時に、基本的にみんな聞いてませんから。

基本的に右であれ左であれ、デモ活動ってのは基本的にはみんなうるさいものなんですよ。左の街宣車でも、憲法九条守れっていう街宣車でも、軍歌流して日本の国体を守ろうと言っている右翼の人の街宣車も、興味のないおおむねの人からしたらただうるさいだけなんですよ。たまに意見をもっている人が拍手してくれるか。それか罵声を浴びるか。でもその声自体にも意見が何かしらあるっていう意味ではいいと思うんですね。左の人でも真剣な人だったら全然話せると思いますよ。少なくとも、そういったことに対してもの考えるって。

あるかないかって、最終的には何かあると思うんですよ。それこそ子どももっている親御さんとか、これからこの国どうなるんだって。僕は子どもがないからああよかったな、将来日本が悪くなっても別に知ったこっちゃねえよ、という悪い冗談も出てくるんですけど。そういった皮肉が言いたくなるような今の状況を何とかしたいと思うのですが、何ともならないんですよ。でも、何ともならないから何も言わない何もしないかといったら、それもなんか癪なんですよ。せめて石の1個でもぶつけてやりたいとか。それを具体的に何かしようと思っている人たちが、こういった運動のなかから市議に手を上げたりとか、そういった流れが出てきているんです。なので、これからこういった運動がもとで考える人もいれば、やっぱり運動があると人が集まる、人と話すことによって勉強する。1人で本読んでも、やっぱり政治って扱うのは人ですからね。いろんな人がいるってこと、一緒に遊べる人がいるってことはバカにできないなって。

ただ、こういった活動、こういったデモ活動とかやっている団体が、これから抗議に行くぞというときに、それが担保になると思うんですよ。実際ネットみたら、こういった面倒くさい奴らが来る、そういう土俵じゃないと行政に行つて話聞いてもらえないですよ。

## 5. 外国人参政権と愛国心

(外国人参政権に反対する理由) いったん引き受けてしまった責任って2度と逃れることができないんですよ。会社と違って、国ってリストラできないじゃないですか。よく議員になるとかって人は、会社の経営やってマネジメント能力っていいですけど、マネジメントって結局その状況に合わせてあり方を変えていくっていう。ただ、日本人リストラされちゃ困りますからね。いきなり「あんた国籍ないよ」って放り出す。

それが僕はマネジメントだと思うので、そこでできないことをやっちゃいけませんって、昔母ちゃんとかに言われてやったことだと思うんですよ。人を引き受けるって、やっぱり僕は仕事上お金いじって——お金というのはほとんど現実ですから——ないものはない、払えないものは払えない。給料払えなかったら、怒って外の対立する会社よりも中の従業員のほうが怖いですから。それに給料でなかったら怒るのが当たり前です。そういったなかで引き受ける責任を果たす能力がそもそもあるのかなのかかってところで、僕はやっぱり根っこだと思っすよ。根っここの国、自分が何者なのかって、結局そこからよきにしろ悪きにしろ離れられないと思うんです。

以前1回だけこういった話って聞かれたことがあるんですよ。××会というところに入入りしていた人がいて、その人からマクドナルドで30分くらい。あなたは どうして こういう風 考える よう になった んですか、 って ずっと 問われる なかで、言葉に頼ってしゃべっているんですよ。例えば我々が出す反日左翼とかっていうキャッチフレーズとか、例えば反日左翼の中身を説明できるかっていいたら、意外とできなかつたりするわけですよ。

そういった言葉に頼っている。でもそのことっていうのは自分のなかでおぼろげながらしっかりやって、それがこの国で生まれ育つてこれまでの経験のなかで、言葉にできないながらもできてきた何となくのものだと思うんですよ。この何となくってものから逃れることって、ずっとできないと思うんですよ。あくまで感覚ですから。で、その感覚を大事にしたいなって。それが僕の中のこの国が好きだ、まあ好きか嫌いかってそもそも論ずるものじゃないっていうものの元なんですよ。しょうがないんですよ。こういった風にできあがっている。

それが、国があつて家族があつて地域があつて、まあ昔牛舎にいた牛も含まれますよ。やっぱり命を考えるとというのは、母方の実家が稲作農家で、肉牛を2頭買っていて、そんなに広い田んぼだったんで2頭いて堆肥のため糞をとって1m積み上げるんですね。糞があつて、それを発酵させて、それをトラクターの後ろに荷台くっつけてそのうえにわんさかのせて、それをフォーク使ってわさわさ撒いて土を作つて。基本的に肉牛ですから、2年たつたらいなくなるわけですよ。で、お迎えの車が来て、お迎えの車には次の子が来ているんです。そういったところに、そういった日に呼ばれて、何かちっちゃいのが来たから、子どもはちっちゃいほうがいい

ですから、そっちをなぜている間にあ行っちゃった、どっか行っちゃった、引越すんだ。で、それを食っちゃったって気づいたのは小6の時。広義でいう食っちゃったです。食肉ですから。でも牛おいしいんですよ、牛肉は。

なんで、今の僕って必然なんです。酒飲んで恥ずかしい思いをすることがあるのも。会社つぶれて悔しい思いをしたのも。そもそもこの国に生まれたのも、父ちゃん母ちゃんから生まれたのも、全部必然で偶然はないと思うんですよ。そう考えた時に、そもそもこの国を好きか嫌いかっていうのがたまにあるじゃないですか。あなたは日本が好きですから、そもそもそういった問いがナンセンスだから。好きであれ嫌いであれこの国で生まれ育った以上、愛すしかないと思うんです。

結局、僕は今在特会にいますけど、別に正直在日嫌いなわけじゃないんですよ。今でもちょっと友達と一緒に飲みに行く韓国料理が在日の人の店とか。本当においしい店なんです。そこ行ったりするし。よく飲みに行くんですよ。一つの店にずっと行っているんですけど、そうしてたらそこに来るいろいろな人と話したりして、一緒に遊びに行こうかとなったり。その人の関係で別の店に連れて行ってもらって、いろいろな話したりとか。そういったのがあって、今行っている在日のおばちゃんがやっている居酒屋も、その関係で行って。これがなかなかおいしくて、本当にいいんですよ。

在特会といたら本当に意地でも韓国人のやっている店なんか行くか、という人もいるし。そうやって肩肘張るのは逆に面白くない。日常生活と活動って全然違いますから。おいしいものは誰が食べたっておいしいし。いい人は何人であってもいい人だし。そもそも考えない、何人がやっているとかそんなこと考えない。うまいかまずいか、ただそれだけであって。あと店の人がいい人かって。

同僚とは（関係する話を）しているって言ったらしてたし……。まあ、全部が全部出しにくい環境ですから。いわゆる在日社会で仕事してたわけですから。実際働いている人はほとんど日本人なんですけどね。ただ経営者とか、メーカーの営業さんとか、そっちのほうにそういう方がおられて。僕が知る限りでは、一緒に働いている同じラインで仕事している勤め人の中で、ヘンな人そんなない。ただ、昔の人は桐喝も、本当にあいさつみたいな世界ですから。「よう、元気か」みたいな。そんなの言われて、そういった中でやっぱり、「どうよ？」って。

結局、日本が嫌い嫌いだって壊している人間が

嫌いなだけなんです。そののわかりやすいのがその当時在特会に入ったときには、民団・総連という外国勢力であり、今でいったらそういった集団とタッグを組んでいる日本人の団体も含めてです。結局根っこは否定できないです。それは頭で考えてなんちゃらって、そういう堅苦しい嫌ですよ。できないです。僕は頭悪いから。もう理論では生きてられない。

なんで、僕は国家観とか正直ないほうだと思うんですよ。どういったことがあって、こういった歴史があって。そうじゃなくて、そういった話を持っている国に生まれたこと、だけなんですよ。だって国家とは何かって聞かれても、正直システム論の話もできないです。ただ今まで経験してきた中で、そう思って今ここにいるっていう。そして気づいたらもう3年以上経っちゃった。そんなに難しくは僕は考えてないですね。他の人はいろいろ歴史的経緯とか、いわゆる皇紀2670年、日本の歴史といったものを国家神道とかそういったものを勉強しつついられているんで、僕よりは皆さんすごいんですけど。僕はそんなに……。勉強はしてるんですけど、基本はそこですね。

## 6. 活動による変化

《活動により得られたもの》

デメリットはたくさん出てくるんですけどね。まず、この活動を始めて外で一番最初に話したときに、そのとき付き合っていた彼女と結局ダメになっちゃったんです。そういったことする人はダメ。それまで6年ちょい付き合っていた。それこそ街頭で会社の人に会ったら面倒くさいな、とか。面倒くさいけど、それはそれなりに大人なんで対処するんでいいんですけど。デメリットはたくさんあってもメリットはないですよ。そもそもこういったことで、僕らは別にお金もらっているわけでもないし。むしろ趣味の時間とかどこかに遊びに行くとか時間を、こういったことで使って。その準備のために使っているし。

良かったことを求めてやってないから、考えたことないですね。ただ会として物事を動かしたときに、結果が出る時には嬉しいですね。やっぱりこういったことやっている、世間様からしたらネガティブな視線がありますから。その意見がどうこうではなくて、ただこいつは面倒くさいって。ものをいう奴は面倒くさいんですよ。

気に入らないものを気に入らないといたい。それぞれスタンス違うと思うんですけど、住民監査請求とか具体的な政治的な行政に手続きしている人も



いて、僕の中ではそういったことができる能力があればやりたいと。そう思うけど、それ以前に気に入らないものを気に入らないといたいんです。で、いっていくなかでそういった集まりだからこそ、そういったことをいっていくなかで何かができるんじゃないか。もういろんな集まりですから。職業にしても、立ち位置にしても。住んでいる地域、職業、社会的な立場、全部違う人間が一箇所に集まっているのですから。その機会があれば、何かできるかもしれない。ただ、今それはなかったとしてもこれからあと10年20年経っていく間に。今は何ができるかというよりも、これから何か爪あとを残せるかもしれない。そこの期待だけです。世の中簡単に変わらないですよ。そんなちっちゃな国ではないし、そんな弱い国でもないし。

景気がそんなに——今はもうひどいですけど——2002年03年に中小企業にお金貸さないとか、そういった指導があったときに、やっぱ現金商売だからパチンコ店というのは。資本金1000万円くらいでできるんです。中小企業融資やってますよ、といういいわけのために使い易い。そういった取引する中で、銀行のほうからパチ店のほうに、そこで不良債権化した土地があるから使ってみないか、そういった話とかもあるわけですから。パチンコ1つ崩すんだって、いろいろなところがガツッと固まっちゃっているんです。役員みたって元警察という人もいたら、それこそ元銀行員でそこで出向のままそこで役員についてという人もいて。それだけで世の中簡単じゃないって見えてきますよね。

パチンコの売り上げ今21兆だとしたら、だいたい粗利15%でいったら3兆円が手残り。その中でいろいろなものやっていくわけですよ。人件費払ったり機械代払ったり土地代払ったりとか。その中で自分もその仕事して、給料も一部入っているかもしれないって、その仕組みの一部ですよ。だからそんなに簡単じゃない。簡単じゃないけどでも、こんなこともあるよね、とずっといつてきたのは事なかれの話で。それで何か悪くなるかもしれないけど、貧乏になるかもしれないけど、言わなきゃいけないことは言ったほうがいいんじゃないか。

で、もしかしたらこれから何ができるかもしれない。今はいろいろと何かやって、あちこちでお騒がせしているみたいになっているけど、日本がさらに悪くなったら……こういって来たところは、それなりの意見を持っている時に来ると思うんですよ。その時に入る（入会する）んじゃないで、常にいて匂いを感じる癖を持っていないと。今何も無いから離れ

ちゃおう、とかそういったものじゃないと思うんですよ。1回入っちゃったからには。そういったことに興味持った自分、消せないですもの。もし僕が今、在特会をやめたからって、世の中の政治のことに興味持たなくなるといったらそれはないし。意見がおおむね一緒であれば、正直一番最初に入ったところでいいですよ。ちょっとの意見を違って他の団体に行ったりとか、あそこはダメだとか他に行ったりとか。おおむねここで僕は満足している。自分で選んだ立ち位置ですから。

#### 《投票行動の変化》

僕は変わりますね。それは変わります。真剣に調べますね。もうちゃんと告示されたら出てくるじゃないですか、私の公約はなんちゃらって。そういう人間をグーグル検索かけて、それで実際過去の前歴がどういったもので、どういった思想信条かってのを調べたうえで選択、その中でマシな選択をする。手伝いができるんなら、つまらないことでも手弁当でやりたいんですよ。行けるのだったら行きたいですよ。ただ、行きたい人ってなかなかいないですよ。政党、関係なくなりましたね。人です。

比例区は別ですね。困るんですよ。今回でいったらたちあがれ日本ってのは、多分我々の……こういった流れでいったらあったと思うんですけど。基本的に力になりえない数ですね。ただ、死票か云々かって実際関係ないと思うんで。そこからスタートすればいいじゃないですか。それしかとれなかったって。じゃあ、取れるように今度はこういったこととして。で、死んだとしても自分の意思ですから。逆に死ぬことを恐れて全然関係ないところに入れたって、それこそそれが一番死んでいると思います。意思表示という点で。

#### 《外国人に対するまなざし》

（在日コリアンより）中国系の方が怖いですよ。実際にやっぱり無茶するんですよ。栃木に店があって、栃木ってすごい宇都宮の中で多くて、いつも来るから昔ゴト師って悪さしてメダル抜いて換金するのが、捕まえようとしたら逃げるんですよ。ただ、中国系になると何かしてから逃げるんです。この距離（20センチくらい）で催涙スプレーかけるとか。それこそ刺しちゃう、ナイフで刺すとかってこともあって。そういったことで触れていくうちに。あとそういったゴト師に対して弁護士ついたって、中国人（のケースが）初めてですよ。僕は預金担当だったので、預金管理とかしてよくわからない入金

があって、何これ？としたら「こういったことがあって示談金」。ゴト師に弁護士がついて示談がついて。どうなってるの？ と。

まあ、不法入国じゃない学生ビザで働いている人もたくさんいますよね。あれ違法なんですよ。で、そういった人を常勤で使っている人を知っていて。まあその人は別にいい人だったんですけど。ただ、いい人かどうかでフィルターかけられない以上、一律ダメって言っちゃうしかないですね。本当に怖い連中は怖いんですから。それこそこの距離で催涙スプレーやられたら、いくら催涙スプレーでも視力を奪われたりするんですよ。眼球痛めますから。そういった姿を現実に見てきた以上、中国人は嫌いとかって思うよりも怖いですね。何しでかすかわからない。ただそれと中華屋でちゃんと働いているおっちゃんとはまた違うわけですから。

普通に生活してたら、韓国は話の種にならないですよ。中国はなるけど韓国って別にあるかっていったら何もないし。(でも中国関連の団体はないので、外国人関係でいえば) 基本的にここしかなかったって感じでしたよね。あのときみんな。だから僕は〇〇の会があったら〇〇に入っていたし。僕はそういったこと考えずに自分が入れるようなところがあったってというのが、ただ一番最初に在特会だけで。その前に××知ったら××に入っていたかもしれないし。

#### 《拉致問題について》

(それ以前の拉致問題については)ひどい話だと。ただ自分とは接点ってなかなか持てないし、その時は持てなかったんですね。(現在の認識について)僕は、横田さんが拉致された3ヶ月か4ヶ月後に生まれたんです。で、そういった部分で言ったら、僕はこうやって今まで生きてきた、三十何年と彼女が拉致されて生きてる三十何年と考えた時に、三十何年という時間がその人にとってどういう時間かって、やったことがないからわからないですけど。何というか、単純に理不尽なんですよ。人の時間が取り上げられるってことが。

#### 7. 結語に代えて

B氏は、自ら「人好き」と称するように人当たりの良い、誠実な印象を受ける人である。「やりたいことがない」という悩みを持つものの、交際相手もいて「正常人口の正常生活」を営んでいたといえるだろう。彼の場合に特異なのは、パチンコ産業という在日コリアンのエスニック・ニッチで働いていたこ

とであるが、それ自体が在特会への参加に結びついたわけではない。彼をして「国家」や「保守」に眼を向けさせたのは、「心震える歴史」であり、つまり1990年代から蓄積されてきた歴史修正主義運動という右派にとってのインフラであった<sup>2</sup>。

ただ、B氏のその後の行動で興味深いのは、ネットでみただけだった状態から飲み会に参加することで「同志」と知己を得たことである。デモなどに参加する以前に、類似した関心を持つ人たちが集まる機会があり、「人好き」だから参加したという。そこで話は大いに盛り上がり、B氏は活動家となっていく。在特会のデモなどをみると、確かに社会生活を営むのに困難を来たすであろう人たちは、一定割合で存在する。だが、それをもって「社会の縁辺で暗い情念を持ってネットに眼を凝らす」担い手像を描くのは誤りだろう。そうした人たちは、在特会のなかでも周辺的な参加者である。デモの申請や集会会場の確保、会計、各種連絡といった組織運営を担っているのは、B氏のような「正常人口の正常生活」を営む人たちであることが多い。

その意味で、不安や鬱屈した心情といった剥奪による説明では、社会運動論の学説史としてのみならず、現実の理解として不十分である。問題は、そうした人たちがなぜ在特会にひかれ、多くの事実誤認と曲解にもとづいて「在日特権」を糾弾するのかであろう。この点については、別稿で少しずつ論点を提示していきたい。

#### 文献

安田浩一、2010、「在特会の正体」『G2』6: 76-105.  
———、2011、「ネット右翼に対する宣戦布告」『G2』7: 270-295.

(付記) 本稿は科学研究費補助金による研究成果であり、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。

<sup>2</sup> 筆者は調査に着手する際、歴史修正主義と拉致問題が在特会への参加動機の背景にあるのではないかと考えたが、それに加えてワールドカップが韓国嫌いを生んで在特会に連なっていた(別稿参照)。